渇くことが無い
永遠の命に至る水

ヨハネ4章7~26節
2021年1月24日
松田 基子 師

人はどうしたら、自分の罪深い真の姿、魂の飢え渇き、真の必要に気付くことが出来るのでしょうか。 イエス様時代のイスラエル社会は、エルサレム神殿では、盛大な祭儀が執り行われ、民衆の隅々まで、律法による厳しい生活が強いられていました。 表面的には、神様を信じ、従っているかに見えました。 しかし、その中身を開けてみますと、人間の物差しで計り合う、律法監視社会であり、神様の御心からは遠く離れた、人間による律法社会でした。

それは、信仰の命が涸れてしまった社会になってしまっていました。 平安、喜びは無く、常に人の目を気にして生きていました。 信仰の難しさ、人間の罪の深さがそこにあります。 人間は根本的に、生まれ乍らに罪の根を持っていますから、外からの強制で自分を制することは出来ません。 反って反発心から、心の中には、怒り、憎しみ、嫉妬(しっと)、妬(ねた)み、敵意、争いなどの罪が溜め込まれて行きます。

イエス様はそのような人間を、その罪から解放し、神様の霊を受けて、真の命に生かすために、この世に生まれて来られ、宣教に立たれました。イエス様の愛の言葉と行為は、多くの民衆を引き寄せました。 彼らは罪を悔い改め、弟子たちによって洗礼を受けました。 その数は洗礼者ヨハネによる受洗者よりも多く起こりました。 その事は当然、社会の律法監視役であります、ファリサイ派の人々の耳にも入りました。

彼らは先に、洗礼者ヨハネの授洗に悶着を付けた人々です。 イエス様の許にも来て、悶着を付けるに違いありません。 イエス様は、そのような無益な論争を避けるために、ユダヤからガリラヤに帰ることにされました。

イエス様は弟子たちを連れて、ユダヤを出発されましたが、 ヨハネ4章4節には、

「**しかし、サマリアを通らねばならなかった。**」

と記されています。

「**通らねばならなかった**」

とは、

『そこに特別な意味があった。』

と言う事です。 ユダヤからガリラヤへ行くには、サマリアを通る方が道路も歩き易く、時間も節約出来ました。 しかし、ユダヤ人も律法に縛られている人々は、サマリア人を宗教的に汚れた存在として、彼らと接触することを避けるために、わざわざヨルダン川の東側の悪路を、時間を掛けて通りました。 イエス様はそのような律法から自由であるばかりか、一人の魂を求めてサマリアに足を踏み入れられました。

イエス様の一行は、ユダヤから歩き通しで、サマリアのシカルと言う町に入り、ゲリジム山の近くのヤコブの井戸の傍らで、休憩を取ることにされました。 イエス様も、弟子たちも全身埃にまみれ、イエス様は旅に疲れてそのまま井戸の側に座ってしまわれました。 正午頃のことです。 弟子たちは食べ物を求めて、町に出かけました。イエス様は井戸の傍らで1人の人が来るのを待っておられました。 すると1人のサマリア人女性が水を汲みにやって来ました。 イエス様は喉の渇きを覚えておられましたので、水を汲みにやって来たその女性に、

「**水を飲ませて下さい。**」

と頼まれました。

女性には、イエス様が一見してユダヤ人だと分かりました。 そこで彼女は、

「**ユダヤ人のあなたがサマリアの女のわたしに、どうして水を飲ませて欲しいと頼むのですか。**」

と尋ねました。 私たちは、

『井戸の前に居て、水の一杯くらい、何も惜しむ事なく、飲ませてあげたら良いのに・・・。』

と、簡単に思いますが、人間の対立と言うのは、たった一杯の水も差し出そうとはしないのです。ユダヤとサマリアは、同胞でありながら深い溝がありました。 律法ではイスラエル民族の血筋の純潔を尊びました。 サマリアは紀元前722年に、アッシリアに滅ぼされたために、異民族の入植と、 彼らの偶像が入り込んで来ました。 そのために血筋も、信仰も、混ざり合ってしまったのです。 そのため、ユダヤ人たちは、サマリア

人たちを汚れた存在として、宗教的に軽蔑しました。 律法主義の人間ならば、口が裂けてもサマリア人に、

「水を飲ませて欲しい。」

とは言わない間柄だったのです。

そのような関係から、彼女は、イエス様の疲れ切った姿、汲む道具も無く、そこに座っている姿に、自分の優位を感じて、この様な言い方をしたのです。 イエス様はそれに対して、10節で、

「もしあなたが、神の賜物を知っており、また、

『水を飲ませてください』

と言ったのがだれであるか知っていたならば、あなたの方からその人に頼み、その人はあなたに生きた水を与えたことであろう。」

とお答えになりました。

イエス様はここで、御自身がどんな存在かを分からせようとしておられます。 著者ヨハネは、イエス様の存在を、3章16節で、

「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。」

と言っています。 口語訳では、

「神はそのひとり子を賜ったほどに、この世を愛してくださった。」

と訳されていました。 その御子イエス様が、人となって、世に来て下さったのは、世を裁くためではなく、世が救われるためです。 イエス様はその使命を一時もお忘れになることはありませんでした。

イエス様はこのサマリアの女性にとっても、神の賜物であり、救い主であられるのです。 イエス様はその事を分からせようとしておられました。 彼女は、イエス様のその答えに

『ただ者ではない。』

と思うと同時に、

「生きた水を与える」

と言う言葉に急に関心が高まりました。 そこで態度が変わり、**主よ**という、当時の、男性に対する丁寧な呼び方に変わりました。 11節に、

「あなたは汲む物をお持ちでないし、井戸は深いのです。 どこからその生きた水を手にお入れになるのですか。」

と尋ねました。 彼女は急に2つの疑問が湧いてきました。 彼女にとって、生きた水とは、湧き水、流れている水を意味しました。

『この人は目の前のこの井戸から、それをくみ出してくれると言うのだろうか。 いやいや、この井戸は泉ではない。 では、どこからその水を手に入れると言うのだろうか。』

もう一つの疑問は、自分達サマリア人が最も尊敬し、父と崇めている、ヤコブよりも偉い存在なのだろうか。 父祖ヤコブはこの井戸を与えてくれた恩人です。 彼らばかりか、今に至るまで、自分達の命が守られて来たのは、この井戸のお陰です。 そこで

「あなたはわたしたちの父ヤコブよりも偉いのですか。」

と尋ねました。

するとイエス様は13節で、

「この水を飲む者はだれでもまた渇く。 しかし、わたしが与える水を飲む者は決して渇かない。 わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水が湧き出る。」

とお答えになりました。 サマリアの女性は、

「渇くことがない」

と言う言葉にますます吸い寄せられて15節に、

「主よ、渇くことがないように、また、ここにくみに来なくてもよいように、その水をください。」

と願いでました。 彼女にしてみれば、周りの女性達が暑さを避けて、夕暮れ近くに水汲みにやってくるのに、彼らに会いたくないために、昼の一番暑い時に、水汲みに来ているのです。 それは苦痛でした。 その事が解消されるなんて一番願っていたことでした。

すると、イエス様は水とは全く関係の無いことを言い始められました。 16節に、

「行ってあなたの夫をここに呼んで来なさい。」

と言われたのです。 彼女にとって一番触れられたくないところに、イエス様は切り込んで来られました。 彼女はこの問題に触れられたくない、答えたくなかったので、

「わたしには夫はいません。」

と答えて、逃げようとしました。するとイエス様は、

「夫はいませんとは、まさにそのとおりだ。あなたには5人の夫がいたが、今連れ添っているのは夫ではない。 あなたは、ありのまま

を言ったわけだ。」
とお答えになりました。

彼女は5人も夫を替え、今はもう正式に結婚しないで、同棲しているのですから、世間からは、身勝手で、我が儘な身持ちの悪い女性だとの烙印が押されていたことでしょう。 そのため、彼女は常に周りの人々に反発を感じていました。しかし、それは、

『誰も自分を本当に理解してくれる人がいない』

と思って居る心の表れでした。 彼女は身勝手なようで、魂は飢え渇いていたのです。 6人も連れ添う相手を替えたと言う事は、自分を本当に愛し、受け止めてくれる相手に出会えていないと言う事です。 彼女は人間の愛に挫折し、失望しながらも、

『今度こそは、今度こそはと思ながら、遂に、6人目になってしまったのです。』

本当の愛に出会えない自分、心から人を愛せない自分、それ故に自分も傷つき、相手も傷つけて、心の内は、恨み、憎しみ、嫉妬、怒りを貯め込んで、罪が詰まって行くばかりでした。

イエス様は人間の罪をうやむやにはさせられません。 罪の根本に気付かせて、罪の解決はイエス様以外に無いことに気付かせて行かれます。 サマリアの女性は、イエス様が自分の全てを見通して、おられる事に気づくと、

『そのような力があるのは預言者だ。』

と判断しました。 かの預言者、つまり、モーセが申命記18章の15節から18章で告げている、

「**わたしのような預言者を立てられる。 あなたたちは彼に聞き従わねばならない。**」

と言った、モーセのような預言者であるなら、聞きたいことがありました。

ユダヤ人も、サマリア人も先祖を同じにしながら、互いに礼拝所を別にし、自分達の正当性を主張し合ってきました。 元々神殿は、ソロモンが建てたあのエルサレムにありましたが、紀元前586年新バビロニアに破壊されてしまいました。紀元前515年には、捕囚から帰って来た人達によって、第二神殿がエルサレムに建てられました。その時、サマリア人たちは、建設に参加させてくれるように頼んだのですが、血筋を重んじるユダヤ人達は、これを断りました。

一方サマリア人は、紀元前400年頃エルサレムに対抗して、ゲリジム山に、神殿を建てて礼拝を献げました。 ところが紀元前128年に、エルサレムの大祭司ヨハネス・ヒルカノスは、ゲリジム山の神殿を破壊しました。 その結果は、互いに一層憎しみ合う関係になってしまいました。ただその後も、ゲリジム山では祭儀が続けられていました。 このような歴史的背景がありましたが、彼女は、自分の全てを知っておられる方に出会った事によって、真理を求める心が起こりました。神様の前に出て、やり直したいとの気持が湧いて来たようです。 そこで彼女は、20節で、

「**わたしどもの先祖はこの山で礼拝しましたが、あなたがたは、礼拝すべき場所はエルサレムにあると言っています**(どちらが正しいのでしょうか)。」

と尋ねました。

するとイエス様は、21節で、

「**婦人よ、わたしを信じなさい。あなたがたが、この山でも、エルサレムでもない所で、父を礼拝する時が来る。 あなたがたは知らないものを礼拝しているが、わたしたちは知っているものを礼拝している。 救いはユダヤ人から来るからだ。**」

とお答えになりました。 同胞で対立し合い、敵意を抱きながら、どんなに多くの動物犠牲を献げ、盛大な祭を行い、神様を礼拝している積もりであっても、そんなものが神様に受け入れられる筈がありません。 そんな人間のために、イエス様は、人間が神様に罪赦され、礼拝が出来るように、御自身を犠牲として、献げられるのです。

イエス様は、その御自身を指して、

「**救いはユダヤ人から来る。**」

と言われました。 それは、神様の約束でした。そこでイエス様は、23節に、

「**まことの礼拝をする者たちが、霊と真理をもって父を礼拝する時が来る。 今がその時である。 なぜなら、父はこのように礼拝する者を求めておられるからだ。**」

とお答えになりました。

では、神様が求めておられる礼拝とはどん

なものでしょうか。 イエス様は24節に、

「**神は霊である。 だから、神を礼拝する者は、霊と真理をもって礼拝しなければならない。**」

とお答えになりました。 神様は霊なるお方です。**霊なるお方を礼拝する**ためには、**人間の側にも霊が必要**です。 イエス様が働かれるところに、聖霊は共に働かれ、イエス様を信じる者のうちに働いて下さいます。 神様を礼拝するには、その働かれる**聖霊によって**、真心から**真実**をもって、**礼拝が献げられる**ことを**神様は求めて**おられるのです。

イエス様は彼女に、

「**わたしを信じなさい。**」

と言われました。 彼女は、イエス様を信じたいと思いました。 それと共にメシア待望の思いが湧いてきました。 25節に、

「**わたしは、キリストと呼ばれるメシアが来られることは知っています。 その方が来られるとき、わたしたちに一切のことを知らせてくださいます。**」

と言いました。 彼女は、

『神様の真の御心を知るためには、キリストと呼ばれるメシア、救い主が来て、教えて下さるのを待たなければならない。』

と思ったのです。

すると、イエス様は、彼女に、

「**それは、あなたと話をしているこのわたしである**」

と、御自身の身を証されました。 彼女は分かりました。

『このお方を信じることが、生きた水、永遠の命に至る水を飲むことになるのだと分かりました。』

彼女がイエス様を信じた時、イエス様は彼女の、これまでの人生の苦しみ、罪、汚れを全て吸い取って下さいました。 そして、心には愛、喜び、平和、希望が湧いて来ました。 神様はイエス様を信じる者に、聖霊を注いで聖霊の賜物をくださるのです。

聖霊が**注がれる**のは、イエス様を**信じることによってだけ**です。 イエス様はその事を、

「**わたしが与える**（命の）**水**」

と言われました。 **聖霊**はキリストを信じる者の心に**宿って**くださり、常に神様の**愛を注ぎ**、神様の**御心を教えて**下さいます。 どの様な困難、試練の中にも、キリストが**共に**おられ、神様の**守り**の中に、聖霊の**助け**があることを**信じることが出来ます**。 聖霊の助けによって、神様に祈ることが出来ます。 礼拝をする事が出来ます。 そのような人生は、決して涸(か)れることがなく、渇くことがありません。 イエス・キリストを信じることは、そのような人生を歩ませて頂けると言うことです。

イエス・キリストを信じるに優る人生はありません。 私たちは聖日毎に、共に礼拝を献げ、そのことを確信して、信仰の旅路を歩み抜いて参りましょう。

お祈りを致します。

憐れみ深い天の御父様　罪に汚れ
あなた様に祈りを捧げることも、
礼拝を献げることも、
不可能な私たちでありましたのに、
イエス様の十字架の贖いによって、罪を赦してくださりありがとうございます。 そればかりか、
御聖霊が働いて下さり、イエス様の愛と喜び、
平和をお与え下さる事を感謝致します。

御聖霊は、私たちの魂を常に潤し、永遠への希望をお与え下さいます。
この素晴らしい世界に、私たちを引き入れて
下さったイエス様に
心から感謝いたします。

どうか、イエス・キリストを主と信じて従い、聖霊に導かれる人生を歩み行かせてください。

尊い救い主イエス・キリストの
お名前によってお祈りを致します。
アーメン。